

# 中国における近代西洋教育思想の伝播と変容について(1) —1860年から1911年まで

Spread and Transformation of the Western Educational thoughts in China—1860 to 1911

王 智 新

中国における一世紀にわたる近代西洋思想の伝播と変容について、大学の教育学科および教員養成課程に用いられる教育原理のテキストを手がかりに歴史的に検討する。二十世紀初頭、西洋から「Education」及び「Pedagogy」を中心とした近代教育学の思想を、日本を経由して「教育」、「教育学」という中国人にとって分かるように理解できない日本語訳の新語で、中国に輸入し、それは中国の近代教育の原点となった。しかし、自らの民族の伝統と切り離れたところで行われた、このような思想の単純移植は、「誤訳」で象徴しているように先天的で致命的な問題を抱えている。本論文は中国近代教育思想形成の過程として、そのような言葉の輸入によって代替された思想輸入の歴史を検証し、中国近代教育思想が伝統と乖離するという現象の発生原因について考察し、中国近代教育思想史の再構築を試みようとする。

キーワード：中国近代教育思想、思想の伝播、思想の変容、宣教師、巖復、進化論、誤訳

## 目 次

### はじめに

- I 西洋教育思想と近代中国の初期遭遇
- II 日本を媒介して西洋教育思想を取り入れる経緯  
日本の教育近代化の経験  
両国の置かれた環境、立場の相似  
教育の役割についての認識の相似  
地理上の接近と言語上の相似
- III 近代西洋教育思想の中国における変容  
故意の「誤訳」  
無意識の誤訳  
日本語による言語上の影響  
日本語の新訳語で西洋の教育思想を表現できるか  
「教育」と「Education」について

### 付録；日本語から翻訳一覧

巖復の新語と日本からの新語対照表

日本から取り入れた新名詞と専門用語

## はじめに

中国近代教育思想の形成は長い複雑な歴史を辿っている。そこには西洋の衝撃、それへの中国の反応、対応が見られる。前世紀末から今世紀10年代にかけて、西洋教育思想は怒涛のように中国になだれ込んできて、何千年も続いた中国の封建的教育体系を崩壊させ、古い教育思想の改革を促した。しかし、中国と西洋の邂逅は日本を介在して行われたところに致命的な大問題を抱えている。夸美紐ス（コメニウス）、斐斯泰洛斉（ペスタロッチ）、赫爾巴特（ヘルバルト）、杜威（デューイ）、五段階教授法、新教育等がかつて中国では一世を風靡した。さらに、今世紀の半ば以降、大陸で猛威をふるい、中国の教育学界を牛耳ったのはソ連の教育理論である。ソ連邦解体後の今日までも、なおその影響力は衰えを見せない。1872年ドイツ人宣教師花之安(Ernst Faber)が中国で西洋教育を紹介する最初の本『ドイツ学校論略』を出版してから、今日までの歴史を振り返って見れば、大きく五つの段階に分けられる。1843年から1900年までが第一段階で、西洋の宣教師たちが中心となって、西洋の学校を紹介した。1900年から1911年のデューイ訪中までが第二段階で、日本を経由してドイツのヘルバルト教育学を中心に大量に中国へ輸入していた。そして1911年から1949年までが第三段階で、アメリカのデューイの実用教育学が主であった。1949年から1966年までが第四段階で、中華人民共和国の「ロシヤを師とす」というスローガンの下に、ソビエトを介在してマルクス思想が中心となる社会主義の教育学理論の取り入れと伝播があった。その後、文化大革命（1966年）とその終焉（1976年）以降、今日までを第五段階とし、嘗てないほど広範囲にわたって西洋の教育思想の移入と紹介が行われているのが今期の特徴である。このような歴史についての整理と研究は、いままで東西文化交流史及び、日中教育交流史の一部として細々と行われてきた。教育史及び教育思想史の角度からの研究はやっと1990年代後半に入ってから見られるようになった。例えば周谷平の『近代西方教育理論在中国的伝播』（広東教育出版社 1996年11月）、衛道治主編『中外教育交流史』（湖南教育出版社 1998年6月）などがある。しかし、その僅少の研究は、西洋教育思想や制度などを取り入れた経緯を中心に進められ、具体的な内容の検討及びその影響、さらに近代中国教育思想の形成との関係については、ほとんど言及されていない。世紀の終わりに際し、本研究は、大学の教育学科および教員養成課程に用いられる教育原理のテキストを中心に、一世紀以上に亘る中国における近代西洋教育思想の伝播と変容について、内容とその影響に焦点を絞って歴史的に検証してみたい。

## I 西洋教育思想と近代中国の初期的遭遇

中国近代、最初に西洋の教育制度を中心に教育思想を翻訳し紹介したのは宣教師である。15世紀ごろ中国に渡ってきたイタリアの宣教師エレニ（Julio Aleni、中国名、艾儒如）は『西学凡』を著し、西洋の教育制度、特にヨーロッパの大学の学科設置、カリキュラム、学年配置、教授方

法及び試験等を詳しく紹介していた。『四庫全書総目提要』では、この本を「所述皆其国建国育材之法」①(述べているのはその国の建国と人材養成の方法)であるとして収録されている。また、エレーニは『職方外記』でも西洋諸レベルの学校の設置、規模、修学年限、カリキュラム、試験方法、教師の資格等も紹介している。

アヘン戦争(1840年)後、西洋の大砲、軍艦を通じて、中国人はやっと西洋を認識し始めた。清朝政府は西洋と交渉する時に、「言語不通」の不便さを感じ、1862年北京に、中国最初の近代大学—京師同文館を設置し、西洋の言葉等に通曉する人材の養成に着手した。しかし、教師となる人間がなくて、やむをえず、外国の宣教師(アメリカ人宣教師丁韋良W・A・P・Martin)を近代大学の学長—総教習に任命したのである。そして、南京条約などの不平等条約によって、さらに活動を認められ、治外法権まで手に入れた宣教師たちは、広大な中国での宣教活動に自らの非力を感じ、「聡明で豊かな中国人に先に神の道を得させ、それから彼らに福音を広めさせよう」②と、作戦を変え、中国で学校を作り、中国人を教育することに力をそそぐようになった。

ドイツ人宣教師花之安(Ernst Faber)は『ドイツ学校論略』と『泰西学校論略』(又の名は『西国学校』ともいう。1872年)を著し、アメリカ人宣教師狄考文(Calvin Wilson Mateer)は『振興学校論』(1881年)を出して、古訓至上で、カリキュラムが狭すぎるという旧式教育の弊害を批判し、教育改革を加速するようにと、清朝政府に提案した。1890年、アメリカ人宣教師丁韋良は、清朝政府総理各国事務衙門(今日の外務省)から日本を含む西洋列国の教育制度を視察するように委託され、3年がかりでアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スイス、イタリアイ日本など七ヶ国の学制を考察して回った。帰国して『西学考略』というレポートを総理衙門提出した。イギリス人宣教師李提摩太(Timothy Richard)は『七国新学備要』(1889年)『整頓学校』(1893年)、『五洲教務』(1892年)を執筆し、イギリス、ドイツ、フランス、ロシア、アメリカ、日本、インドなどの国々の学校教育、新聞出版、図書館についての紹介をし、中国の学校教育と比較して、中国教育を「法度が善く、淵源が幽遠で、設備施設も遠い昔から絶えることなく伝わっている。それは五大州各国の学校とは比べられない」と一応持ち上げながら、しかし、惜しいことに「それらの学校の教育は述古しか知らず、自らを束縛し、五大洲に博く通ぜず、時流に乗ることができない。」③と書いている。さらに、清朝政府に「学校を興す」など四つの提案をした。日本の教育制度についても宣教師たちがいち早く紹介した。アメリカの路意斯(G. H. Lewes)著、衛理訳、範熙庸述『日本学校源流考』(江南造船局訳書館1890年)では、幕末の教育状況を説明し、学制の頒布から、新しい教育方法まで、教育近代化の様子を紹介した。また、『日本東京大学規定』(著者不明)(江南造船局訳書館1891年)では、東京大学の総則から、食堂規則、授業料徴収規定、学科規則、総長職務規則、学位規則、図書館規則まで網羅的に紹介している。

時代はやや下るが、甲午(日清)戦争後の1896年、アメリカ人宣教師林樂知(Yong Allen)は森有礼の『アメリカ諸名流の振興文学成法』を中国に翻訳し『文学振興策』④という書名で出版した。翻訳の狙いについて、林樂知は序文の中でこう説明している。「日本の強大は西学に基づき、

西学の美善は米国の通人に拠る。…中華振興策として」(『文学興国策』広学会訳印 1896年 P3)である。

中国人顔永京⑤が1882年『肄業要覧』という翻訳本を出した。原著者名は大英史本守となっているが、スペンサーの代表作『教育論』の第一章で「最も価値のある知識とは何か」を訳したのである。それは初めての中国人による西洋教育思想の紹介で、1880年(明治13)尺振八訳『斯氏教育論』より2年遅いということは非常に興味深い。

しかし、この時期の清朝政府は、「師夷長技以制夷」というテーゼに基づいて、取り入れる「西学」の範囲を「西芸」、つまり西洋の工業技術しか認めなかった。西洋の近代教育については、あくまでも近代的な学校を設置し、西洋の技術を身につける人材の養成に限って行われた。一方、宣教師が中心になって翻訳し、紹介した近代西洋教育はシステム、制度等に偏り、断片的で零細なものであった。

## II 日本を媒介して西洋教育思想を取り入れる経緯

西洋教育思想が大量に紹介されるようになったのは甲午(日清)戦争以降になる。日本を経由し、日本を媒介として西洋教育を取り入れたのである。夸美紐ス(コメニウス)、盧梭(ルソー)、洛克(ロック)、ス賓塞(スペンサー)斐斯泰洛斉(ペスタロッチ)、福祿培爾(フレーベル)、赫爾巴特(ヘルバルト)、杜威(デューイ)等の伝記、学説理論はほとんど日本語から転訳したのである。1898年9月の「戊戌政変」で変法自強を称えて敗れた梁啓超⑥は亡命先の日本で日本語から大量に翻訳して新聞雑誌に寄稿した。『論古代西蠟(ギリシャ)学術』、『斯片那莎(スペンサー)学案』、『盧梭(ルソー)学案』(学案とは学説の紹介という意味。)等で、ルソー等の思想を紹介した。中国最初の教育専門誌『教育世界』(1901年5月上海創刊、1908年1月廃刊;全166号、羅振玉主編、商務印書館編修発行)は藤田豊八を編集顧問に迎えて、系統的かつ全面的に教育理論を翻訳し紹介した。藤田豊八は東京帝国大学文学部を卒業した後、中国から招聘を受け、羅振玉の主宰する上海農学会の機関紙『農学报』社の日本語通訳として赴任した。1898年、江南製造局に工芸館が新設の時、学堂訳員として招かれ、工芸専門書の翻訳に従事した。『教育世界』は二〇世紀初め、日本明治時期の教育制度、法規等を紹介し、中国の教育近代化は日本を範とすべきであると力説した雑誌のひとつであり、日本の学制、教育法規の考察、研究について、「日本学士藤田豊八氏の努力は大変大きかった。」⑦藤田豊八が日本人学者飯盛挺造の『物理学』を中国語に翻訳し、王季烈の潤色を経て、江南製造局から刊行した。これで初めて「Physics」という意味の「物理」が中国語に現れたのである。商務印書館の『教育世界』と相前後して、日本語の翻訳本の出版を主旨とする出版社が雨後の竹の子のように現れた。1911年までに、上海、杭州、武昌を中心に、そのような翻訳・出版機構の数はなんと百社を突破した。例えば、日本語からの教科書の出版を主とする文明書局、中島力造著、麦鼎華訳『中等教育論理学』、または幸徳秋水著、趙必振訳

『二十世紀之怪物帝国主義』を出版した広智書局、教育、哲学、倫理学等を網羅的に翻訳して、『普通百科全書』(全百巻 1902-1910年)を出版した会文学社、盧梭(ルソー)の『社会契約論』(日本原田潜訳、楊廷棟中国語訳1903年)または加藤弘之著『物競論』(楊蔭杭中国語訳 1902年)、『英国維新史』(羽化生中国語訳 1903年)等を出版した作新社、東京に本部をもち、留学生が中心になって活躍した訳書社等があった。

そのような状況の下に、中国最初の教育原理のテキスト『最新教育学教科書』(1906年)が繆文功によって著された。さらに8年後、張子和の執筆によると『大教育学教』(1914年)も世に問うた。中国で最初に教育学、或いは教育原理という科目をカリキュラムとして取り上げたのは、1904年公布の「奏定学童章程」であるが、中国人自ら教師教育用の教科書を執筆したのはあれから10年も経った後のことである。しかし、いずれも日本の教育学テキストが下敷きになっている。そのほかに、尚仲衣がヘルバルトの『一般教育学』をフェル・キングの英語訳本から中国語に訳し『普通教育学』という書名で、商務印書館から出版したのは1936年に入ってからのものである。

日本を経由して西洋に学ぶには、色々な理由がある。中でも、甲午(日清)戦争の惨敗が一番大きい。洋務運動を興し、「夷」を制する技術を「夷」から習ったが、甲午(日清)戦争で脆くも敗北した。勝利した日本はその勝因を教育に帰し、負けた中国側も色々反省した結果、最大の原因を教育に求める。皇帝や大臣は勿論、一般の知識人までも、敗戦の原因は国民の体質の衰弱にあると認識した。つまり日本は明治以降の近代教育で西洋に学び、民智を開き、人材を養成して国力をつけて列強に仲間入りしたのである。翻って中国の教育はどうかと、まだ旧式の科挙に固守し、空洞で無用な内容で人材を拘束し、民智を窒息させている。反省の結果、「教育—人材—救国」という図式に辿り着いた。その手本はまさに当時の強敵の日本である。光緒帝はついに1898年8月9日に、「出国留学については、西洋は東洋に如かず、東洋は近くて旅費も安い。文字も相近くて通曉しやすい。且つすべての西洋図書はみな日本で要を選んで翻訳してある」⑧らである、という旨の上諭を出した。文化伝統、政治体制、地理条件などから言っても、日本に学ぶしかないという確信が朝野を問わず得られたわけである。

しかし、日本が強大になった原因は西洋の進んだ思想、文化、技術を取り入れたことにあるということを分かっているながらも、敢えて直接西洋に学ぶのではなく、日本を介在させるのは、なぜであろうか。その理由は総じて次のようなものがある。

### ① 日本の教育近代化の経験

西洋化から日本化へと辿り着いた日本では、西洋の教育について取捨選択、吸収、消化、融合等が繰り返し行われた。フランス、ドイツ、オランダ、イギリス、アメリカ、ロシアなどの国々の学制を比較参考した後に、明治の新学制が策定されたのである。明治5年「学制」の頒布を以って日本は近代教育のスタートを宣言し、西洋化の道を歩み出した。それから、1890年の「教育勅語」の公布まで、20年近くの模索をしながら、日本はついに独自の道を歩み出した。つまり、西

洋の衝撃を受けながら、西洋化に抵抗し、日本式の近代化を見出したのである。忠君愛国、ナショナリズムの高揚を訴える「教育勅語」を制定し、さらにその精神をすべての学校教育に押し広げた。そして、一連の教育令改正を行い、西洋技術と東洋道徳の分離を図った。つまり、西洋化は技術と実践の範疇にとどめ、教育のカリキュラム、教育方法と学校の組織等に限る。教育の道徳目的や働きは伝統的日本民族伝統哲学に限定して行われる。従って、服装から言葉まで、日本国民の生活スタイルや生活物質における西洋化が猛スピードで進んだにもかかわらず、日本の教育宗旨はいわゆる「自由主義」や「個人主義」によって侵食されることはなかった。これは当時中国で主流を占める「中体西用」という思想方法論や東西価値観とは非常にマッチしていた。中国教育も西洋の先進的な技術または知識を取り入れなければならないと同時に、民族の伝統を守らなければならないという使命を背負っている。その矛盾克服に貴重な経験を提供してくれたのである。

日本に学べば、不必要な失敗や模索の苦勞が省け、最小の努力で、最大の効果が得られる。特に、中国の国情に合わない、または相反する西洋思想の浸透を事前に防ぐことができるのである。康有為は日本のことを中国の「斥候」、「水先案内人」、「探検隊」等に喩えて、日本の経験・教訓を汲み取れば、「その害を取り除き、その利を悉く得ることができ」、西洋では三百年掛かって実現し、日本では三十年をかけて成就したが、「吾中国は国土が広く、人民も多いので、変法（改革）三年で自立できる。爾後、日のさし昇る勢いで富強になり、万国の先端をいくであろう」<sup>⑨</sup>と、非常に楽天的だった。

## ② 両国の置かれた環境、立場の相似

黒船事件以降、日本は中国と同様、西洋列強の侵略と脅威に晒されていたが、明治維新を起こし、天皇制の維持を前提に、教育を手段として、西洋の学問を取り入れ、留学生を派遣して、改革の人材を育てて、民智を開いて、東亜の雄となり、西洋列強に伍した。清末の中国人も封建的帝政を温存しながら、教育で人材を養成して、維新変法を通じて、清朝勢力の衰退を食い止め、西洋列強の進出に抵抗しようとした。そして、そのような情勢の下で日本は唯一成功した事例である。

## ③ 教育の役割についての認識の相似

1885年に文部大臣に就任した森有礼は教育と学問を分離し、教育は個人のためならず、国家のためであるとはっきり打ち出した。森の献身的な努力により国家主義とナショナリズム教育体制が確立した。教育において、権力は国に集中し、明治政府が学校の整備に力を入れ、エリートを養成し、国民全体の素質を高上させて、富国強兵、殖産興業という目標を達成したのである。これもまた「修身・齐家・治国・平天下」という中国伝統教育の目標と一致しており、教育を通じて国家と民族の危機を打開しようと焦心する憂国の士に大いに歓迎される。

#### ④ 地理上の接近と言語上の相似

日中両国は「同文同種」といわれるほど文化言語上近く、さらに地理的にも接近しているので、視察には経済的で、便利であるという考えがある。

大きく見れば上記のような利点があり、中国は日本を範に択んだのである。中国の師範教育は学校規則からカリキュラムの設置、教授方法まですべて日本の真似をした。このような雰囲気の中で、教育理論、思想も自然に日本から取り入れることになったのである。

上記の理由で今世紀に入ってから、中国には日本語から教育原理の本を翻訳する高まりが起こった。1896年京師同文館では東文館を増設し、日本語翻訳者の養成に着手した。1897年、康有為、梁啓超が上海で「東文を主として、西文を輔とし、政学を優先し、芸学を次にする」<sup>⑩</sup>という趣意書を出して、大同訳書局を設立した。1902年から1904年までのわずか3年間で533点の翻訳本が出た。そのうち日本語から訳されたのは321点で、全体の60%を占める。学校や教育に関するものは48点で、日本から訳されたのは39点あり、総数の81%を占める。

一世紀も前の翻訳本について正確に統計を出すのは至難の業である。元早稲田大学教授実藤恵秀監修、香港大学譚汝謙編纂の『中国訳日本書総合目録』の統計によれば、1896年から1911年まで、中国では日本語から訳された教育関係の書籍は76点ある。<sup>⑪</sup>最初に日本語から訳された教育原理のものは日本文学士立花銚三郎口述、王国維訳の『教育学』である。1901年上海で発行された『教育世界』第9, 10, 11号に連載したのである。日本語から訳された教育関係の書籍は大きく講義・テキスト類、新聞雑誌に連載類と単行本類に分けて整理すると(別表一、日本語からの翻訳本の一覧)の通りである。

### Ⅲ 近代西洋教育思想の中国における変容

巖復<sup>⑫</sup>の『天演論』発表百周年を機に、近代初期の西洋著書の翻訳に「誤訳」があるとの指摘が出て話題を呼んでいる。(例えば、雷頤「立足本土、有心誤訳」『南方週末』1999年1月号) 西洋思想を中国に翻訳紹介するにあたって、啓蒙思想家たちはすでに中国または中国の大衆を救うために、中国国民のためになる部分だけを取捨選択して翻訳し、中国人に分かるように「誤訳」したというのである。約1世紀も前に生存していた翻訳者と今日我々の認識が完全に一致していることはないであろうし、現在を生きるわれわれも、今日の言葉で百年前の人を語らなければならないから、作業は困難を極める。しかし、西洋の教育思想が中国でどのように紹介され、消化されたという、いわば近代中国教育思想再構築の作業は、世紀末中国教育界の混迷を打破する上で、緊急かつ必要である。次に日本を媒介にして取り入れられた西洋教育思想が、中国でどのように理解されたかを手がかりに、西洋教育の中国での変容ぶりを探りたい。

## 故意の「誤訳」

雷頤氏の論文によると、嚴復の翻訳した『天演論』(Thomas Henry Huxleyの『進化と倫理』)には誤訳があり、つまり、「天」というものについての理解は西洋にあったのか。それから、元のタイトルは「進化論と倫理学」であるにもかかわらず、嚴氏はその前半にあたる「進化論」を訳して、後半の「倫理学」を割愛した。つまり、嚴氏からみれば、中国に必要なのは「進化論」であり、「倫理学」は中国にすでにあるということであろう。

嚴復の翻訳に「誤訳」があるかどうか、それを専門的に検討した論文「嚴復の『天演論』と赫胥黎の『進化論と倫理学』」(取伝明)が1997年第六期での『文芸理論研究』に掲載された。著者は1901年ハックスレーの英文原作を嚴復の中国訳本と突き合わせて詳しく検証した。詳細はそれに譲るが、問題はなぜ、この時期に再び「誤訳」の問題がクローズアップされたのか、である。そもそも、嚴復が翻訳するとき、原作を忠実に中国語に直す方法を探らなかった。これはすでに公然の事実である。当時の中国の現実に照らし、取捨選択して、評論及び解釈を加えたり、書きなおしたりまでした。嚴復の書いた評論と解釈は元の文より長いものもしばしばある。『進化と倫理』の原作者ハックスレーは博物学者でダーウインの親友であり、熱烈な支持者でもある。本書は1893年著者がある学会での講演原稿を元に書かれたものである。解釈のなかで、嚴復はダーウインの進化論を紹介し西洋学問と中国の伝統学問とを比較し、ハックスレー説とイギリス社会学者スペンサー(Herbert Spencer)説と比較しながら、自説を展開した。自然界の熾烈な生存競争と自然淘汰の無情さについてはハックスレーの文章を引用しながら説明し、ダーウインの生物進化論を解きながら、中国人に警告を発した。中国人は一刻もはやく奮い立って自ら強大にならなければならぬ、さもないと列強の奴隷に成り下がり、国が滅び種族が滅亡する。「天演」の法則に従い、変法・維新を挙げるからこそ淘汰を避ける唯一の道である。当時の社会情勢や現実問題と結びつけて、それへの回答を出そうと、嚴復が『天演論』の翻訳作業を通じてなされた。科学者としてのハックスレーが知識と信念とを切り離そうと努力したのに対して、哲学者としての嚴復はそれらを一体化しようと苦心した。ハックスレーが『進化と倫理』で「人類倫理」と「自然法則」について論じているにもかかわらず、嚴復は「進化論」の部分しか訳さなかった。それは彼が初めから原書を忠実に翻訳し紹介するつもりがないということの証拠である。それから、自然科学界の進化についてハックスレーが説いているだけなのに、嚴復はそれを「人類の種の保全、自らの富強」にまで拡大して解釈している。これが所謂「誤訳」である。「誤訳」をもてはやす者は嚴復のそのような救世精神を謳い、学問の有効性と学者の社会的責任を強調した。問題はそこである、学問の有効性と真理、社会責任と真実、それは常に一致しているとは限らない。それは近代中国思想界のジレンマでもある。しかも、学者は銘々に学問の有効性を追及し、自己流に社会責任を定義しがちであるから、誤訳は当然続くだろう。このような言論が中国でまだ幅を利かして、正当化されているかぎり、当面、真実や真理への接近は望めないという事を逆に物語っているのではなからうか。



### 無意識の誤訳

もう一つの誤訳がある。日本経由、ソビエト経由、経由の目的は借用であり、他人が消化したものをそのまま取り入れるということである。苦労はしない、また、しても半減することは確かに前人のいう通りである。しかし、自ら生みの苦しみを経験せずに、自分の歴史、文化伝統と格闘せずに、他人の訳したものを取り入れたのである。その心境は、まさに康有為がいみじく言ったように「たとえば、家を建てるが如し、欧米は設計し、日本は匠で建て、吾が住むのである。また、田を耕すが如し、欧米が種をまき、灌漑をし、日本は草を取るが、吾はそれを食べるのである。」<sup>⑬</sup>まさしく労せずして得ようとしている。他人が取捨選択し、咀嚼したものをそのまま鵜呑みにしては、西洋思想の真髄をほんとうに学べるのか。それから、例えば、自由、真理、博愛というような言葉では、漢字で書かれているので、果たして、西洋民主主義の真骨頂が伝わるのか、それも疑問である。「天」といっても、中国の伝統では、すべての存在を超越し、自分を支え、活かしてくれるものを指すが、果たして西洋の「天理」、の天と同じであろうか。翻って康有為、梁啓超、嚴復等所謂改革の急先鋒、西洋思想の熱狂的な鼓吹者が、なぜ晩年になって、保守的になり、保皇派に転落したのかを考える場合、功利的に西洋思想の接近という彼らの思想方法にも問題があったのではないかと思われる。そういう問題をを含めて検討する必要があるように感じられる。

前述したように、甲午（日清）戦争を境に、西洋教育思想の取り入れは第一期と第二期の二つに分けられる。第一段階と第二段階とを比べれば、次のような特徴と違いがあることに気がつく。

第一段階の場合、取り入れた内容は軍艦、大砲兵器等製造技術を優先に物理、化学、工学、天文地理といった自然科学が中心である。従って、当時の学者は、第一段階のそのような傾向について、「要は語学文字の勉強だけであって、天文・地理・算術・化学に至ってはただ皮相浅学なものにすぎない」と、辛辣に批判した。<sup>⑭</sup>第二段階はそのような傾向に代わって人文社会科学の内容が増えて、学校管理や教育制度、教育理論が主要な地位を占めた。さらに、第一段階の活動は西洋の宣教師が積極的にイニシアティブをとって行われ、中国人が消極的で受身的で付随的であった。例えば、書籍や内容の選定は殆ど西洋宣教師が行い、翻訳もまず宣教師が訳を作って、中国人がその中国語の表現をチェックして整理する。しかし、翻訳に関しては一字一句非常に真剣に行われたようである。翻訳は単なる言葉の置き換えではない。言葉によって表される思想、理念についても忠実に再現しなければならない。それはまさに西洋思想の民族化の努力であろう。最初に翻訳するとき、どのように西洋の知識や思想を中国語で表現するかということばの創造で、大変苦労した。京師同文館と肩を並べる上海江南製造局翻訳館（1867年—1890年）では新しい名詞の翻訳については、次のような決まりを作って行われた。

#### A 中国語にすでにある名詞

中国語にすでにある名詞は、それを使用する。しかし、それが判らないで、しかも辞書でも調

べられないものは、すでに翻訳されている本を参考にするか、あるいは中国のメーカーまたは工芸師等、その道の専門家に問い合わせをして、教を乞う。

#### B 新しい名詞を作る

中国語にないものの場合、新しい名詞を作らなければならない。その場合、

①すでにある文字に偏と作りを付けて新しい名詞を作り、読みは昔の字のままにする。例えば、鎂 (mg マグネシウム)、矽 (Si ケイ素)、砷 (As 砒素)、鈾 (Pu プルトニウム) 等は中国に昔なかったものであり、化学元素の名前が多い。また、昔あっても、あまり使用されない漢字名詞で、新しい意味を付与する。例えば、鉀 (K カリウム)、鉑 (Pt 白金)、鈷 (Co コバルト)、鋅 (Zn 亜鉛) 等は昔と異なった意味が付与された。②漢字造字法に基づき複数の漢字で新しい意味を表す。例えば、氧氣 (O 酸素)、軽気 (H 水素)、火輪船 (汽船)、風雨表 (晴雨計) 等である。③音訳する。その場合、標準語 (公用語) を基準にする。西洋言語の発音を各漢字にあてはめ、すでに使用されているものは、それを援用する。

#### C 中西名詞対訳名詞帖を作る。

考案した新しい名詞については、人名、地名にかかわらず、対訳一覧表にまとめる。本の最後に付けて読者の便利を図ったり使用の便を図る。⑮

そのような地道な努力を積み重ねて、江南製造局翻訳館は『金石中西名目表』(1883年)、『化学材料中西名目表』(1885年)や『西薬大成薬品中西名目表』(1889年)、『気机中西名目表』(1889年)と鉱石冶金、化学、薬品及び蒸気機械分野に関する西洋専門用語の中国語との対訳表を発行し、新しい名詞を定めたのである。

封建式教育の訓練を受けた巖復は言葉使い及び文章の表現について非常に重視していた。ハックスレーの『進化と倫理』を翻訳するに先だって漢代、晋代の仏教翻訳法にまで遡って調べ、それを参考にしたのである。原作に忠実であることを前提に、原作者の言わんとするところの意味を十分汲み取り、美しい中国語で再現する、「信・達・雅」という翻訳の法則を打ち出した巖復は近代中国翻訳の第一人者としてと公認されている。

巖復が翻訳する時に、「…慣用的な中国語で伝えることを心がけた。現実には、新しい表現を創り出すには無限の苦勞が要求され」、⑯彼自身のことばによれば、「一名之立、旬月踟躕」、(一つの用語を一ヶ月も思案することさえあったという。「物競」、「天沢」、「儲能」、「効実」等新しい言葉を発明した。「総じて巖復は、日本人がそれまでの二、三十年間に造り出された新語はほとんど用いなかった。」⑰アメリカの中国学者B・I・シュウォルツは、巖復が日本人の新造語を拒否した具体例として、『群学肆言・自序』を挙げている。『群学肆言』はスペンサーの『社会学研究』の中国語訳で、そこで巖復は「Society」の訳語として日本語の「社会」を退け、伝統的概念の「群」を選んでいる。巖復によれば、「群」の方が西洋の「society」、つまり社会構造というよりは社会集団としての社会の概念にずっと近いということである。さらに巖復はジョン・スチュアート・ミルの『自由論』(On Liberty)を『群己權界論』と訳した。「Liberty」を「自由」と訳すの

は、すでに当時の中国翻訳界では常識になっている。しかし、それを敢え使用しない嚴復は、「Liberty」の原意は中国語の「自由」と異なると考えたからである。中国語の「自由」は一般的に恣意放蕩、勝手気まま、無責任などネガティブな意味があり、「Liberty」は「他の何物にも束縛されない」という意味で、ネガティブでもポジティブもない中性的なものであると、理解し、自由と訳さなければならない個所を全部（自繇）と訳しているとわざわざ断っている。（繇）は「由」の仮用字であるが、ミルのいう自由を実現するには、まず、集団（群）と個人（己）の権利限界をはっきりしなければならない、「群」の如何なるところで、「己」が自由であり、また如何なるところでは自由でない、という認識をまず持つべきであると、嚴復は主張していた。

しかし、1900年を境に第二期、つまり日本を経由して西洋のものを取り入れる際には、そのような努力は見られない。つまり、日本人がすでにそのような名詞を（日本語）漢字に直したから、そのような面倒な手間は省かれたわけである。いわば、西洋思想の民族化の努力が見られないどころか、皮肉なことに、嚴復自身も逸早く自分の酔心した「物競天択、適者生存」というスローガンにぶつかってしまったわけである。「中国人留学生が大群をなして日本へ留学し、日本語の翻訳が大量に流入すると共に、新しい日本製の語彙が採用されるようになり」、表二に見られるように、彼が苦勞して「造った新語の大部分は日本製の新語との生存闘争に敗れ、消え去ることになったのである。」<sup>⑧</sup>（表二、嚴復の新語と日本からの新語対照表参照）嚴復の翻訳をまとめて出版した商務印書館の編集者は「中西訳名表」を巻末につけた。そこには482個の新語が載っているが、現在引き続き使用されているのはわずか56個しかなく、全体の12%未満となっている。

### 日本語による言語上の影響

中国の言語学者たちが現代中国語にある音訳を除いた新しい外来語をつぶさに調べたところ、「その大部分が中国人の創造ではなく、日本人の（創造した）訳をそのまま使用している」<sup>⑨</sup>と指摘している。（付録 表三 日本から取り入れた新名詞と専門用語を参照）

ちょうど時期が中国の文言文（古典）から白話文（現代文）へ移行しているので、日本語の漢字造字法まで中国に入っておびただしい量の現代中国語を産出した。

例えば：

#### 1 「化」という接尾語のつく複合詞

緑化 赤化 風化 激化 気化 特殊化 大衆化 近代化 科学化  
工業化 先鋭化 民族化 自動化 一元化 口語化 実用化 前衛化 理想化

#### 2 「式」という接尾語のつく複合詞

速成式 問答式 簡易式 西洋式 流動式 複合式

#### 3 「性」という接尾語のつく複合詞

可能性 必然性 現実性 偶然性 広汎性 原則性 必要性 習慣性 創造性  
近代性 後天性 先天性 組織性 相対性 絶対性 積極性 消極性 普遍性

4 「界」という接尾語のつく複合詞

思想界 教育界 文学界 芸術界 金融界 新聞界 出版界 財界 政界

5 「感」という接尾語のつく複合詞

好感 悪感 情感 敏感 美感 性感

6 「点」という接尾語のつく複合詞

要点 観点 焦点 重点 拠点 氷点 注意点 出発点 終点 盲点

7 「観」という接尾語の複合詞

楽観 悲観 人生観 科学観 世界観 宇宙観

8 「論」という接尾語のつく複合詞

宿命論 無神論 唯物論 唯心論 一元論 多元論 方法論 認識論 推論  
立論 結論

9 「法」という接尾語の複合詞

帰納法 演繹法 弁証法 綜合法 分析法 手法

10 「炎」という接尾語のつく病名

気管炎 関節炎 肺炎 脳炎 胃炎 腸炎

11 「作用」という接尾語のつく複合詞

副作用 精神作用 心理作用 積極作用 消極作用

12 「問題」という接尾語のつく複合詞

民族問題 農民問題 民族問題 社会問題 土地問題 死活問題

13 「時代」という接尾語のつく複合詞

旧石器時代 新石器時代 青銅器時代 大航海時代 鉄器時代

14 「社会」という接尾語のつく複合詞

奴隷社会 封建社会 農耕社会 市民社会

15 「主義」という接尾語のつく複合詞

人文主義 社会主義 帝国主義 現実主義 無政府主義 絶対主義

16 「階級」という接尾語のつく複合詞

地主階級 農民階級 無産階級 抑圧階級 搾取階級

17 「学」という接尾語のつく学科名：

財政学 経済学 生物学 物理学 心理学 倫理学 家政学 政治学 歴史学  
社会学 冶金学 園芸学 教育学

18 「的」という接尾語のつく複合語

一般的 積極的 比較的 全面的 部分的 相対的 応急的 絶対的 革命的

19 「上」という接尾語のつく複合語

意味上 生活上 基本上 学問上 研究上 事実上 原則上

上記の17,18,19の複合詞は中国で元々使用しているものを更に意義を拡充したりしたものである。例えば17の「学」という接尾語は、イギリスロンドン会宣教師の艾約瑟 (Joseph Edginess) と中国人李善蘭が協力して『植物学』を翻訳するとき、すでに考え出したもので、顔永京が西洋の心理学を翻訳するとき、『心靈学』という書名を付けた。しかし、このような翻訳の試みは日本から大量に取り入れる前のとこで、定着していなかった。「学」を使って学科名にするという方法は日本からの輸入と言える。

#### 日本語の新訳語で西洋の思想を表現できるか

いったい現代中国語には日本語からの外来語がどのくらいあるのか、もはや数えることすら難しい。しかし、上記の言語学者の研究により明らかになった部分で、われわれが言えるのは、非常に広範囲にわたって中国語に移植してきた日本からの外来語が、現代中国語（口語と文章語）に計り知れない影響を及ぼし、文学から哲学、経学（四書五経を専攻する中国独特の経世学問）、法学、歴史学、数学、理学、生物、天文、地理、医学、農学等に至るまですべてカバーしており、現代中国語の不可欠の一部となっている、ということである。

第二期の日本からとり入れた新しい外来語に押されて、西洋宣教師またはその中国人協力者によって、第一期にはほぼ固定していた新しい外来語の訳語の大部分は淘汰されてしまった。例えば：

中国語訳	英語	日本語訳
母財	Capital	資本
甲必丹	Captain	船長
密斯特	Mister	先生
轍路	Railway	鉄道
德律風	Telephone	電話
士敏士	Cement	水泥
康克利脱	Concrete	混凝土
通物電光	X-ray	X射線
賽因斯	Science	科学
德莫克拉西	Democratic	民主
心靈学	Psychology	心理学
葛郎馬	Grammar	文法
巴力門	Parliament	議会
寒暑表	Thermometer	温度計
默達費西加	Metaphysica	形而上学
斐祿所費亜	Philosopher	哲学

しかし、日本語の漢字はすでに数百年乃至千年も前に中国から離れて日本に伝わり、その間に日本では多様に解釈され、新しい意味も付与され、日本語の一部として定着した。そして、福沢諭吉など啓蒙家たちに見られるように、西洋思想を表現するため、伝統倫理または伝統思想と格闘しながら血の滲み出るほどの努力をし工夫を重ねた。中国の学者はそのような日本語の新語を見て、漢字としてはすぐ読めたであろうが、それが表現している西洋思想の原意を果たして正確に読みとれたかどうか、はなはだ疑問である。事実、百年前にすでにそのような問題を提起した人がいる。まず、日本に学ぶことの利点をたくさん挙げ、この運動では大活躍してリーダー役を演じた梁啓超がそのような方法に異義を申し立てた。例えば、「Economy」を日本では「経済」と訳したが、それよりも「平準」と訳した方が、もっと妥当ではないか、「Revolution」は「革命」よりも「変革」と訳した方が、より確実ではないかと。また、1920年代始め、「将来的小律師」というペンネームを使った彭文祖という人が『盲人騎瞽馬之新名詞』（盲人が目が見えない馬に乗るような新名詞）という本を著して、日本からストレートに大量の新名詞を輸入することを猛烈に非難した。彼が言うには、日本語から輸入した新語は甲午（日清）戦争敗北後から始まった。まだ日にちがさほど経っていないのに、現在の中国人は至るところで、新語を見せびらかして使う。一般人の通信文の中にも、十中六七が新語で、やれ「目的」とか「宗旨」とか「絶対」とかで、恥づかしいことだらけだ。そして、「衛生、同化、盲従、取締、引渡、目的、宗旨、代価、継承、経済、法人」等60近い新名詞を挙げて、分析批判した。さらに彼は、このようなことは「恥知らずである」だけでなく、「亡国滅族」（国や民族が減びる）に繋がるから、一刻もはやく停止すべきである、と主張した。しかし、日本からの新しい名詞、新しい術語は、新しい知識、新しい思想、新しい概念を内包して怒涛のように中国になだれ込んできて、全国の隅々まで浸透していき、もはや何人も阻止できない時代の潮流と化した。梁啓超自身も「革命」や「経済」を愛用するようになり、彭文祖の非難には誰も耳を貸さなかった。

大量の新知識、新思想、新概念の流入に、まず出版界、報道界、教育界、学術界は大きく変革を迫られた。西洋の知識をいち早く受け入れ、その思想に酔った青年学者が新しい名詞、新しい単語を駆使して、論文を執筆し、本を著して西洋思想を大いに鼓吹した。世事に疎い読書人は新聞を広げても、本を読んでも意味の分からない単語、新しい名詞がずらりと並んでいたのも、理解に苦しんでいた。そのような情勢を受けて、出版界は透かさずに新しい名詞、新しい用語を説明する辞書を出した。代表的なものとして、『新日本名詞』、『漢訳日本法律詞典』、『漢訳法律経済詞典』、『普通百科大詞典』、『新尔雅』等がある。これらの辞書の編集、出版は新しい名詞、術語の中国本土化の実現を可能にした。

さらに、中国の言語学者の研究によれば、第一段階の欧米から直接翻訳輸入の言葉は、器物部品など具象的な名詞が多いのに対して、第二段階の日本からの輸入は哲学など抽象的な言葉が多い。それは採り入れる内容に関係するであろうが、ことを一層複雑化している。第一段階の翻訳

新語はいかにも舶来品という感じが強い。例えば、沙發 (sofa)、烏托邦 (utopia)、白蘭地 (brandy) 等である。しかし、日本語からの新語は基本的に中国の漢字をアレンジし、中国の古典から選出した漢字に、まったく関係ない、或いはそれに近い西洋から仕入れた新しい意味を付与されたもので、外来語かどうか、字面では判断できない。中国人がそのような日本の漢字新語を中国流に理解したのであるから、文字だけから憶測判断することは無かったであろうか。嚴復の努力がわれわれに古くて新しい問題を付きつけている。

近代西洋思想の中国移入の歴史を考えると、少なくとも次のような疑問を抱かざるをえない。まず、西洋の近代教育思想は果たして現在、われわれ中国人が使用している日本語新訳の漢字で表現しきれているか。それから、中国古来の漢字と日本が加工し新しい意味を付与した漢字との間にどれだけの隔たりがあり、それにわれわれがどこまで気づいているのか、である。

このような疑問を解くために、日本から輸入した西洋思想を表す単語について、西洋の元来の意味と中国漢字固有の意味そして、中国人が理解しているところの意味、少なくともこの三通りの意味を比較しながら検証してみる必要がある。しかし、それは膨大な作業となるから、とりあえず、具体例として、「教育」という言葉について分析を試みてみよう。

#### 「教育」と「Education」について

教育は「Education」という英語の日本語訳として、中国人がそれを輸入したということは前述の通りである。しかし、これは元々中国語にすでにある単独に成立していた二つの単語である。

「教」は左側「孝」で、その上部の「爻」は真似をする様子を表す旧体字で、子どもが教える人から習い真似をしているという意味で、右側の「攴」は、手に棒を持っている絵で鞭打ちの意味、軽くたたいている動作を表すものである。つまり、大人が教え、これを子どもが習うという意味であることがわかる。外側から与えるというイメージが強烈である。

「育」は上の部分は子どもをさかさまにしたもので、赤ちゃんが母親の体内から出てくる様である。下の「月」は、肉や身体を示す字を作るにくづきである。自動詞として使うときは、子どもが生まれて大きくなるという意味で、他動詞としては、子どもを産み、大きくするという意味である。さらに、漢代の許慎撰の『説文解字』でも、「教、上所施下所效也；育、養子使作善也。」と基本的に同様である。オーソドックスな解釈では、大人が教え、子どもがこれを学んで善い方向へ伸び育つようにするということになる。また、この「上」とは行政上の上位者が下位者への指示という色彩が強いという指摘も出ている。

「教」と「育」をはじめ一緒に組合せて使用したのは孟子である。君子（国の王が）が国を強大にするためには、どうすべきかと議論する文脈で、「得天下英才而教育之、三樂也。」（『孟子・尽心下』）<sup>②</sup>と提案したのである。「教」と「育」という独立した二つの単語をつないで用いたものであり、現代語に訳すと「育才」という意味で、近代的な意味の教育ではないのが明らかである。中国の古典の中では、このような用例は他にずっと時代が降って宋朝（十世紀ごろ）に一例

(「又安暇先之以教育、漸之以徳義乎?」『岳州学記』宋・尹洙)を見るしかない。孟子本人もそれ以外の場合で教育についてたくさん語っているが、「教」と「育」とは分けて使っていた。(『孟子』に出る「教」と「育」の頻出度はそれぞれ35回と3回である。)  
 「教」と「育」とが複合語として大量に使用されるようになったのは、今世紀に入ってからのことである。この孟子の用例は色々な場合で引き合いに出されるが、少なくとも、それは近代の「Education」から翻訳された「教育」の意味でないことは、すでに多くの先行研究が指摘している通りである。

西洋の「Education」(英)やフランス語ドイツ語の「Erziehung」等は共通して「Educare」というラテン語源を持っている。ラテン語の接頭語「E」は出るとか出すの意味で、「ducare」は引くという意味がある。従って、「Educare」は「引き出す」という意味になる。つまり子どもが内面に持っている可能性を外からの働きかけによって引き出す、という解釈が普通である。

では、日本から輸入された「Education」の訳語としての教育を中国人はどう受け止めているのか、それを知り得る手立てを、もはやわれわれは持ち得ない。しかし、現代中国で教育の定義については調べることができる。そこから古代の概念を引けば、つまり、近代に入ってから拡大した内容が見える。

近代中国において、「教育」という単語はいつから使用し始められたのが重要である。前述の『四庫全書総目提要』は乾隆五四年(1789年)に完成したもので、そこに収録されている三千四百六十一種類、七万九千三百九巻の書籍には、「教育」という言葉の付いた書名は勿論ないし、膨大な量に上る提要にも、「教育」という言葉は使用されていない。前述の宣教師エレーニ(Julius Aleni)の『西学凡』は西洋の教育制度、特にヨーロッパの大学の学科設置、カリキュラム、学年配置、教育方法及び試験等を詳しく紹介していた。西洋の建国と人材養成の方法には「分六科。所謂勸鐸納加者、文科也。斐祿所費亜者、理科也。黙第濟納者、医科也。也勒義斯者、法科也。加諾搦斯者、教科也。陡祿日亜者、道科也。」<sup>②</sup>とそれぞれ説明していた。また、別の所で中国入学者が「学範」、「教範」という言葉を使って、勉強法、教授法の内容について説明している。何れも「教育」ということばは使われていない。さらに、前述の森有礼の『Education in Japan』の中国語訳は、1895年末、96年頭にかけて行われたが、すでに中国語の書名でも分かるように、訳者たちは、「Education」を「文学」という中国語にあてていた。これで判るように、「教育」という復語詞の使用は日本から大量に西洋思想を採り入れる際に、少なくとも1900年代に入ってから始まったのである。

中国では1980年代から教育辞書、辞典など参考図書の出版ブームを迎え、山東、江西、広東、上海等各地の教育専門出版社では相次いで『教育辞典』等を出している。中でも権威的であると目されるのは『中国大百科全書・教育巻』(同百科全書編集委員会編 中国大百科全書出版社 1985年 北京)と『教育大辞典』(同大辞典編集委員会 上海教育出版社 1989年)である。二辞書の「教育」についての定義及び解釈は中国において一番権威を持っているといわれ、次のようにはほぼ同様である。教育は「人間を養成する社会的営みであると一般的に理解されている。社会



の発展、人の発展と密接に関連している。広義的には、人間の知識・技能の増進につながり、人間の思想道徳に影響を及ぼす営みはすべて教育となる。狭義的には、主に学校教育を指す。それはつまり教育者はある社会（もしくは階級）の要求に基づき、目的を立て、計画的に組織的に、被教育者の心身両面に影響を施す。それを通じて被教育者をその社会（もしくは階級）に必要な人間に育て上げる。なお、教育は時々思想道徳教育と同意義に使用される。」②西洋の近代教育思想を踏まえながら展開された、非常に穏便で妥当な定義であるとは言えよう。しかし、広義的であろうと、狭義的であろうと、いずれにしても中国の伝統的な教育観が強く働いている。近代中国教育史を紐解いて見れば、その伝統概念の強靭さが分かる。二十世紀前半の党化教育③が然り、二十世紀後半の教育のプロレタリアート独裁の道具論④も同様で、一度政権の座に就くと、さまざま教育を政権維持の道具に利用するのである。それはみんなこの古い土壌を温床にしている。

#### 終わりに代えて

以上分析してきたように、用語上は近代化し、西洋の思想・概念を持った新語をたくさん取り入れ、日常的に使用するようにはなったが、自らの伝統との格闘もせず、基本概念の更新、新思想の吟味、新用語の定義など一連の基本作業も疎かにされてきた。制度、体系、用語にいたるまで近代的なもので一新したが、そのような華やかな表層的な更新とは裏腹に、中国教育には一体どれだけの実質的な変化が起きたか？もし、あるとしたら、それは選択しながら、中国人が自ら引き起こしたもののなのか？それとも迫られたものを受動的に受け入れただけなのか？さらに、そのような変化は教育伝統を含め、中国の社会にどんな意味合いを持ち得たのか？例えば、「奏定学堂章程」の頒布、科挙制度の廃止など一連の変革は、中国教育発展の内面的な要望に因るものなのか、それとも単なる西洋の衝撃への反応なのか、中国近代学校教育の役割と社会的機能は西洋近代学校教育とは同様であるか？中国教育の独自の発展法則とは何か？中国教育の伝統は何か、など、そのような問いに回答を出さない限り、「教育」及び「教育学」で書き表している「Education」と「Pedagogy」に代表される近代西洋教育思想は、中国では永遠に単なる借用の旗、或いは外套の役目しか果たせない。（未完続く）

注

1) 『四庫全書総目提要』また『四庫全書総目』とも呼ばれ、清政府が乾隆三十七(1772)年から十数年間掛けて、全国の読書人を総動員して編修した大規模な叢書である。編修期間中、各地から集めてきた大量の書籍について、厳密に選定し、叢書に編入するものと編入しないものを仕分ける。しかし、編入されたものと編入漏れのものも含めて、すべて簡潔な概要がついてる。後にその概要が一冊にまとめられた。それは『四庫全書総目提要』である。

—中華書局 1983年6版による

2) 「Haw may educational work made most to advance The Cause of Christianity in China?」 Calvin Wilson Matter 『中国近代学制史料』第四輯 朱有猷主編 華東師範大学出版社 1993年 P94-106

3) 李提摩太「論新学部亟宜設立」 同上書 P132—133

4) 森有礼編『Education in Japan』(英語)は、弁務使(明治初期の外国駐在官)としてアメリカ駐在中の森有礼が、自ら英文で緒言を記述した本である。1873年(明治六)1月1日、アメリカ合衆国ニューヨーク市のアップルトン社で刊行された。森がアメリカ有識者十四人に対し、日本の将来につき、改善すべき点等関する教示を仰ぐ旨の依頼文とそれへの回答書簡で構成されている。森が緒言で日本の教育について、日本の神代にさかのぼって整理し、明治維新前後の改革まで詳しく説明したものである。中国語訳は森の依頼状と十四人のアメリカ有識者の回答書簡で構成され、日本の努力とアメリカ合衆国の「文学之成法」(教育制度等)が紹介された。(詳細は拙著『近代中日教育思想の比較研究』を参照 勁草書房 1995年)

5) 顔永京(1839—1898)上海生まれ、1848年洗礼を受け、キリスト教徒となり上海王家埠頭近くの教会小学校に入学、1854年米国教習についてアメリカ留学、1862年帰国、牧師となり、武昌等地で伝教、1878年上海に戻る。セント・ジョージカレッジで教鞭をとる。『心霊学』等訳書多数。

6) 梁啓超(1873—1929)字卓如、号任公、広東新会に生まれ、10歳にして秀才になる。19歳の時、万木堂で康有為に学ぶ。1895年、上京して科挙の試験に参加の際、拳人三千人を連合して、日清締約反対の「公車上書」を起こす。康有為と共に維新変法を唱え、「康梁」と称される。後、上海で「時務法」を主宰し「変法維新」を鼓吹。1898年康有為と共に上京し「百日維新」に参加、大同訳書局を創設。ほどなくして、維新失敗、日本へ亡命。横浜で「清議報」を創刊、翻訳、著書に励む。1912年日本より帰国、「中華民国憲法草案」起草、司法総長に就任、1915年の護国戦争に参加、帝政復古に反対。晩年、政界から引退し清華学校で教鞭をとる。1929年北京にて歿す。著書多数、『飲水室合集』に収録されている。

7) 『日中教育関係史』 王桂 主編 山東教育出版社 1993年 P669

8) 同 前書 第二輯上 1987年 p 4—5

9) 康有為 『康海南自編年譜』 『戊戌変法 四』上海人民出版社 1957年 P145

- 10) 「大同訳書局序例」 梁啓超 さねとうけいしゅう監修・譚汝謙編纂『中国訳日本書総合目録』香港大学中文大学出版社 1980年 P63
- 11) 同上書
- 12) 嚴復 (1853-1921) 福建省の福州候官に生まれ、14歳の時、福州船政学堂の受験に合格、卒業後、士官候補生として5年間軍艦で実習、後1877年から2年間イギリス留学、ポーツマス大学、グリニッジ海軍大学で学ぶ。留学中、嚴復は海軍軍人としての道を断念、ダーウイン、スミス、スペンサー、ミル・モンテスキュー・ルソー等に強く関心を持つ。帰国後、天津北洋水師学堂総教習に就任、そこで20年過ごす。この間、天津の「直報」等々に「原強」、「救亡決論」等を寄稿し、教育啓蒙に力を入れる。晩年は上海で過ごし、帝政擁護論を鼓吹、1921年生まれ故郷で逝去。中国の進化論の紹介に決定的な影響力を与えた、ハックスレーの『進化と倫理』の訳書『天演論』の翻訳は甲午(日清)戦争の進行中に進められた。「和議始めて成り、府君(嚴復)大いにショックを受け、自ら翻訳と著述に力を専らにし、まず赫胥黎(ハックスレー)の天演論に従事す。」(『候官嚴先生年譜』)にあるように、嚴復が救国の意をこめて『天演論』の翻訳をした。脱稿して、1895年味経書社より刊行、忽ち中国全土に反響し、進化論、物競、天沢という流行語まで生み一世を風靡し、同時代の中国人に計り知れぬ大きな影響を与えた。スミスの『国富論』、スペンサー『社会学研究』、ミル『自由論』、モンテスキューの『法の精神』著作の翻訳にも手がけた。しかし、当時の啓蒙家たちと違って、嚴復は中国の伝統に立脚して思考し、西欧近代化に対する問題提起をした。『天演論』の翻訳では、ハックスレーの人間倫理は西欧のキリスト教的観点に基づいていたとして、それを拒否し、代わりにスペンサー社会進化論を採り入れた。
- 13) 康有為「進呈『日本明治変政考』序」 王曉秋編『近代中日啓示録』北京出版社 1987年 P88
- 14) 『盛世危言』 1892年
- 15) 張静盧 『中国近代出版史料初編』中華書局 1953年 p9-22
- 16) 『In Search of Wealth and Power Yen fu and West』 Benjamin .I.Schwartz 平野健一郎訳『中国の近代化と知識人 嚴復と西洋』 東京大学出版会 1978年 P89-110
- 17) 同上書 P92
- 18) 同上書 P110
- 19) 『漢語語彙史』 王力 『王力文集』第11巻 山東教育出版社 1990年 P690-703
- 20) 『孟子訳注』 楊伯峻 中華書局 1981年 P309
- 21) 『四庫全書総目提要』 清・永瑤 他撰 中華書局 1983年 P1080
- 22) 『教育大辞典 第1巻』同編集委員会 上海教育出版社 1990年 P3-4
- 23) 党化教育—中国国民党の教育政策で、1927年7月、「国民政府教育方針草案」で始めて打出され、「国民党の指導下、教育を国民化、民衆化へと転換し、教育方針は国民党の基本精神に基づ

いて定めるべきである。」と強調した。後に「三民主義教育」によって代わられた。

24) 教育のプロレタリア階級独裁道具論—中国共産党の教育理論テーゼ—で、1950年代後半、毛沢東によって打出された。「教育はプロレタリア階級独裁に奉仕し、生産労働と結びつかなければならない」という内容で、1966年から始まった、十年間にわたる「文化大革命」は、その端的な現れで、教育は階級闘争の道具、党内政争の手段にまで発展させられた。

附：

表一 日本語からの翻訳一覧

(1) 講義・テキスト類

- 1 『教育学講義』 湘郷顔可鑄習庵  
『湖南学報』第1—6帖 1903年
- 2 『教育学汎論』 江口辰太郎 講演 『新民叢報』第58—60号  
1904年12月—1905年1月 湖南師範学校講義
- 3 『教育学』 波多野貞之助講義 閩 多等湖北師範生編  
1905年 湖北学教務処 (師範教科叢編第一種)
- 4 『教育学講義』 波多野貞之助講義 直隸留学日本速成師範生編  
『直隸教育雑誌』第一年1—4期 1905年
- 5 講義『教育学』 『四川学報・四川教育官報』 1905年
- 6 『教育学参考書』 波多野貞之助 直隸遊歴紳士筆録  
『直隸教育雑誌』第二年第8—12期 1906年
- 7 『教育学』 土肥健之助 小泉又一口述 江蘇師範生編  
江寧学務処 1906年
- 8 『教育学講義』 直隸留学日本速成師範生筆述 韓梯雲節修  
『直隸教育雑誌』1906—1907年
- 9 『教育学』 女子師範講義 宮田修 講述 林歩旬、孫清如編  
1908年 出版元不明
- 10 『新編教育講義』 中島半次郎講述 韓定生訳 東京富山書房  
1911年 出版元不明
- 11 『教育学講義』 長尾梶太郎 述 蔣維喬訳 師範講習社  
師範講義 発行年及び出版元不明
- 12 『教育学』 張繼煦 金華祝編 湖北支郡師範戊堂講義  
発行年不明 湖北工業伝習所印刷部製

(2) 新聞雑誌連載類

- 1 『教育学』 文学士立花銃三郎講述 王国維訳  
『教育世界』第9、10、11号 1901年
- 2 『实用新教育学』 加納友市、上田仲之助 樊炳清訳  
『教育世界』第29、30号 1902年
- 3 『教育学教科書』 文学士牧瀬五一朗著 王国維訳  
『教育世界』第29、30号 1902年
- 4 『实用教育書』 『大陸』 第2号 1902年
- 5 『国民体育学』 西川政憲著  
『杭州白話報』 1902年連載
- 6 『教育学』 不難心子 『浙江潮』 1903年
- 7 『新教育学釈義』 吉田熊次著 樊炳清訳  
『教育世界』第84、85号 1904年
- 8 『応用教育原理』 賀忠良 口述 李士銳校訂  
『東方雑誌』1905-1906年
- 9 『新教育学』 馮世徳 『教育』1906年
- 10 『蘭因氏之教育学』 吉田熊二著 樊炳清訳  
『教育世界』1906-1907年
- 11 『实用教育学』 大瀬甚太郎著 江夏楊彦潔訳  
『教育学官報』1906-1907年
- 12 『家庭学校通用教育学』 桔辺朕、詩女史訳  
『直隸教育雑誌』1906-1907年
- 13 『大教育学』 熊谷五郎 樊炳清訳  
『教育世界』1907年
- 14 『女子師範教育』 佐口美都子著 靄辰訳  
『直隸教育雑誌』1907-1908年
- 15 『实际的教育学』 柳政太郎著 靄辰訳  
『直隸教育雑誌』1911年
- 16 『教育学與教育術』 大瀬甚太郎著  
『教育公報』第三年第9期 1916年
- 17 『何為教育哲学』 吉田熊次著 余中訳  
『教育雑誌』第11卷第1号1916年

(3) 単行本類

- 1 『新教育論』 天眼鈴木力 張肇熊

- 上海文明編訳印書局 1902年
- 2『普通教育学用義』 中島半次郎著 田呉招訳  
移山堂叢書 1903年
- 3『坵氏実践教育学』 (オーストリア) 坵斯佛責特力著  
藤代禎輔訳 中島瑞重訳 大学堂訳書局 1903年
- 4『格氏特殊教育学』 大学堂訳書局 1903年
- 5『教育学』 熊谷五郎著 範迪吉訳  
上海会文学社 1903年 (普通百科全書)
- 6『教育学問答』 富山房編 範迪吉訳  
上海会文学社 1903年 (普通百科全書)
- 7『教育学新書』 富山房編 範迪吉訳  
上海会文学社 1903年 (普通百科全書)
- 8『教授学問答』 富山書房編 範迪吉訳  
上海会文学社 1903年 (普通百科全書)
- 10『学校管理法問答』 富山房編 範迪吉訳  
上海会文学社 1904年 (普通百科全書)
- 11『教育学問答』 下部三之介著 馮霈訳  
上海広智書局 1903年「教育叢書之四」
- 12『休氏教育学』 大瀬甚太郎 「通芸叢書」乙編  
上海通社 1904年
- 13『教育学』 伊沢修二述 張元節閱 三屋大五郎訳  
泰東同文局 1905年
- 14『教育学教科書』 小泉又一著 周喚文等訳  
天津官書局 1906年
- 15『教育学』 (オーストリア) 林篤奈爾著 湯元元一訳補  
陳清震重訳 京師私立第一中学堂 1907年
- 16『教育学』 留寿恵吉著 傅真権筆訳 (抄本)  
出版元不明 1909年
- 17『新教育学』 吉田熊次著 蔣維喬訳  
商務印書館 1909年
- 18『女子教育学』 植山栄次 陳憲容 許家渥訳  
群学社 1909年
- 19『女子師範教育学』 長谷川乙彦著 蕁寿公訳  
清国学生会館

- 20『中華教育教科書』 大瀬甚太郎著 宋嘉釗訳  
中華書局 1913年
- 21『新編教育学教科書』 大瀬甚太郎 劉本植 周之冕訳印  
出版元不明 1914年
- 22『師範学校教育学』 胡卓訳 中華書局 1914年
- 23『実用教育学』 越智直 安東辰次郎著 張肇桐訳  
文明印書局 1914年
- 24『教育学原理』 中島半次郎 尺秀三郎著 季新益訳  
東京教科書輯訳社 1914年
- 25『教育学講義』 森岡常蔵の「教育学精義」に基づき、  
枝江張繼煦が編輯 昌明公司 1910年
- 26『教育学教科書』 小山左文の「実用教育学提綱」により編訳  
宋嘉釗等編訳 中華書局 1914年

(本表は杭州大学の周谷平の資料を参考して作成した)

表二 嚴復の新語と日本からの新語対照表

嚴復訳語	嚴復訳語	嚴復訳語
計学——経済学	群学——社会学	心学——心理学
生学——生物学	覚性——意識	内籀——帰納
外籀——演繹	意宗——唯心主義	泉幣——貨幣
版克——銀行	錫特——都市	功力——勞力
母財——資本	生貨——原料	熟貨——製品
農宗主義——重農主義	勞業爾——律士	殖量——生産力
商宗主義——重商主義		

表三 日本から取り入れた新名詞と専門用語

(人文社会科学系)

社会	政党	政府	民族	階級	哲学	主義	思想	観念	範疇	系統	規範
真理	知識	唯物	唯心	主体	客体	主観	客観	具体	抽象	絶対	相対
感性	理性	分析	国際	仲裁	宣戦	侵略	侵犯	協定	動員	事変	公開
申請	引渡	特権	交渉	主権	制裁	取締	出席	投票	表決	否決	判決

傍証 間諜 抗議 法定 行政 議會 議員 議案 革命 改良 改造 法学  
 法律 法廷 出廷 法人 法則 民法 刑法 警察 自治 批判 拘留 迫害  
 自由 人格 文明 文学 場合 交易 金融 銀行 投資 輸出 輸入 生産  
 市場 支配 分配 手續 巨頭 封建 直接 間接 古典 現代 訓話 社交  
 作品 初步 故意 古典 供給 信号 宣誓 派遣 要素 高潮 低潮 低調  
 特別 特徵 現金 現象 建築 開放 勞働 組合 主席 總理 反動 代表  
 立場 左翼 右翼 散文 詩歌 单位 商品 理想 理論 教育 德育 体育  
 課程 教授 教養 講師 講壇 霸權 半旗 保健 故障 標語 独占 單純  
 常識 報告 講演 会話 母校 管理 節約 業務 学位 学士 權威 情報  
 幹部 素質 會計 免許 教科書 代理人 生産力 牽引車 俱樂部 攻守同盟  
 生産關係 処女地 単行本 所有權 図書館 通貨膨張 形而上学 最後通牒

(自然科学系)

科学 自然 物質 宗教 代数 標本 原子 分子 電流 電池 輻射 芸術  
 美術 美学 版画 漫画 背景 凶案 舞台 演奏 低圧 地質 有機 無機  
 固体 液体 体積 容積 空間 光線 放射 直流 交流 石油 医学 衛生  
 栄養 神經 靜脈 動脈 症状 細胞 温度 結核 半径 直径 触媒 大気  
 波長 方程式 病虫害 伝染病 淋巴腺 未知数 蓄電池 内分泌 外分泌  
 交響楽 小夜曲 導火線 火成岩 高周波 大熊座 自然科学 交感神經

Spread and Transformation of the Western Educational thoughts in China

- 1860 to 1911

Wang zhixin

The formation of modern thoughts of education in China has a long and complicated history with the various reactions to the Western thoughts. From the end of the preceding century to 1910's, the Western thoughts of education surged into China and collapsed its feudalistic education system, which continued for thousands of years and quickened the reform of the old educational thoughts. But the encounter between China and the Occident was mediated by Japan. Five-level-teaching method and Progressive Education, which were advocated by Comenius J.A., Pestalozzi J.H., Herbert J.F., Dewy J., were the ruling ideas of the age. And it was the educational theory of U.S.S.R. that had raged through the educational world since the mid-twentieth century in China.



Still its influence on China does not seem to decline even after the dissolution of U.S.S.R. When we reflect the history until today from the publication of Ernest Faber's book which first introduced the Western education into China in 1872, it was generally classified into five phases. The first stage was 1843 to 1900, when the Western missionaries showed how the Western schools were like. The second was from 1900 to 1911, which was the year when Dewey J. visited China. During the period, Herbert J. F.'s pedagogy was actively imported into China by way of Japan. And the period from 1911 to 1949 was the third stage, when the main consideration was the pragmatic pedagogy of Dewey J., At the fourth stage 1949 to 1966, the Marxism-centered socialism education was brought in via U.S.S.R. and

spread through China under the slogan "Let's follow Russia ". The next stage from the Cultural Revolution (1966) and its end (1976) down to the present day is the fifth, whose characteristic is that the Western educational thoughts were unprecedentedly widespread all through China. It was not until now the inquires and studies about the history stated above had been made as part of the cultural exchange history between the East and the West and part of the history of the Japanese - Chinese educational exchange. The investigation from the standpoint of the history of education and educational ideas first emerged in the latter half of 1990's However, these studies only refer to the process of the introduction of the Western educational ideas and systems, and lack detailed investigation of its substance and influences.

This study will be directed toward the spread and transformation in China of the modern Western educational ideas over a century with special attention to its substance and transformation, examining text books about the educational principles adopted in the department of education and a course of teacher's training.

